



【船は台車に載せられ移動する。生前の関係者たちが、故人を偲びながら、これを引く（曳く）】

精霊流しの見物は何年ぶりであろう。
少なくとも、この 30 年、この為に外出したという記憶はない。
これまで仕事で海外に長期にわたり滞在することはあっても、この時期は例外なくいつも帰国している。
だから、見物にはいつでも行けたのである。
その訳は、物事に興味をなくし、夜の外出が億劫になったのだ。
少年のようなしなやかな心を取り戻すには、これを打破しなければならない。
と、今回は、晩酌のあとの至福の時間、これを投げ打ち、出かけたのだ。

そこは、一瞬たりとも止みやらぬ爆竹の嵐、揺れ動く光の洪水、打ちたたかれる鐘の音と「ドーイ、ドーイ」との曳き手の掛け声。
初盆を迎えた故人の霊を船に乗せ、浄土に送る伝統行事なのだが、「精霊」というようなしめやかな雰囲気はない。
これは別名、長崎名物「盆祭り」でもあるのだ。

でも、よく考えてみれば、去年のこの日、殆どの故人はまだ、この娑婆にいたのだ。
盆の間の暫しの間、帰省した霊は、まだ生々しい思い出と共に、再度旅立つ。
一つ一つの船の全てに、こうした思いが積まれているかと思えば、はかなくもあり、そして悲しい。
精霊流しは長崎の夏の風物詩である。